三年学年だより

No.　11　　２ 月号

令和７年２月 発行

３０９ＨＲ

「学べる人に」

昨年 12 月にあった M-1 グランプリ 2024（漫才の大会です）で真空ジェシカというコンビが「長渕剛の隣のライブ会場で演奏する、ピアノが大きすぎるアンジェラ・アキ」というネタを披露した。何を言っているか分からないかもしれないが、私もよく分からない。このネタを本当に楽しむために必要なのは何か？　まず前提として、長渕剛とアンジェラ・アキを知っていること（**①既存の知識**）である。知識（あるいは教養）は時としてエンターテインメントを楽しむために重要となる。知らないよりは知っている方が楽しめるものは、世の中に意外と多くある。それと、知らないものを恐れない心（**②未知への関心**）も必要だ。今、君が頑張っている受験勉強は、この二つを身に付けるのにうってつけと言える。

昭和期の作家開高健が、自身の少年期から青年期までの個人的体験をつづった『知的経験のすすめ』というエッセイの中に、学びのモチベーションにつながるかもしれない文章があったので紹介しておきたい。この人は 1930 年生まれで、少年時代を戦争の只中で過ごした。中学入学後の生活について語る箇所である。

中学校に入学してから一年間はふつうの時代のふつうの中学生とおなじような学校生活であった。（中略）英語や数学が面白くてならなかったし、課外に耽読（たんどく）できる本は無限にあり、ほとんど一冊ごとに忘我になれた。

昼弁当は授業中にこっそり机の下で食べ、正午になると食堂へかけつけてカレー・ライスを食べ、それは食券さえあれば何杯でもおかわりできた。（中略）

ハチが蜜を集めるようにして英語の単語をひとつひとつおぼえこむことには疲労も倦怠（けんたい）も感じられず、未知の島か大陸をめざして航海するような悦びがあった。漢文も教室でテキストとして使われていない『十八史略』その他をひとりでよちよちと読みたどることに登山のような愉（たの）しみを覚えることができた。十三歳はサン・ルームのようなガラス室のなかにあったわけである。一年間だけ。

（開高健『知的経験のすすめ　ー何んでも逆説にして考えよー』青春出版社）

このあと開高は戦時体制下的な生活を送ることになるが、その直前を回想した文章からは「気ままに勉強すること」の喜びがあふれている。そう、知らないことを知ること（＝学び）とは本来楽しいものなのだ。現時点で「勉強なんて楽しくない！」と思っている君（そんな人の方が多いのでは？）も、５年後 10 年後、何にも縛られなくなると心境も変わるかもしれない。そのとき、今している「受験勉強」は、知識を吸収し自分の頭で考えるための素地になってくれる。この学年の人が一人でも多く、高校を卒業してからも「学べる人」であってほしい。

（３０９ＨＲ担任）

↑学年団有志で合格祈願に行ってきました。君たちの健闘を祈ります。

「戦略を立てられる人に」

私は、何事にも戦略を立てることが好きです。先を見据えて、この目標を達成するために、じゃあ何をしないといけないのか、今は何を優先するべきなのかなどなど、考えることは多いですが、そうすることで、自分のやるべきことがはっきりし、自分から動くことができます。高校卒業後、君たちにはまちがいなくこの能力・感覚が必要とされます。今までのように誰か（今までならば保護者の方や、先生たち）が細かく君たちを導いてくれるわけではなくなります。この学年の人が一人でも多く、高校を卒業してから、知識をしっかり身に付け、未知への関心を持ち、「戦略を立てて何事にも取り組める人」であってほしい。

（３０９ＨＲ副担任）